

英国南部旅行(1999)

その4: ロンドンからテットベリーへ

7月22日(木)

いよいよ英国南部へのスタートである。



左図の緑色の線が今日のロンドンからの走行ルートである(ロンドンからオックスフォード付近までは省略してある)。ロンドンからオックスフォードをバイパスして一路約150km西のチェルトナム(Cheltenham)へ、そこからバーフォード(Burford)まで戻り、南西方向のバイブリー(Bibury)へ、さらにサイレンセスター(Cirencester)を通過して宿泊地のテットベリー(Tetbury)へと進んだ。

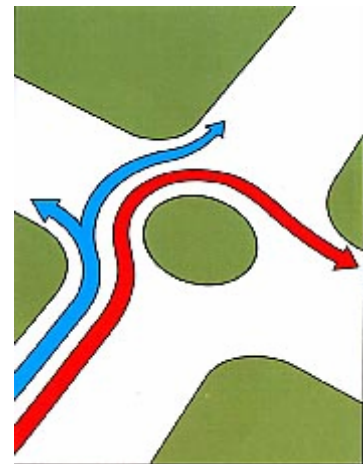
英国の道路の特徴は交差点での進み

方である。ラウンドアバウト(roundabout)と言って日本で言うロータリー交差点がほとんどである(右図)。当然であるがほとんどのラウンドアバウトには信号機がなく、省エネ型交差点と言うことができる。左側通行は日本と同じであるが日本で運転をしない私にとってはどちらでも良かった。それよりも先にお話したマニュアルチェンジの方がはるかに難しかった。

ロンドンからはハイパークの北側道路を西に進みA40(途中M40)を真西に進んだ。途中、オックスフォードの近くで「この先オックスフォード・パーク・アンド・ライドステーション」の表示が出ていた。しばらくすると左側に大

きな広場があり大型バスが止まっていた。おそらく郊外から自家用車でオックスフォードへ行く人はここでバスに乗り換えて市内へ入るのであろう。以前、大学の街オックスフォードへレンタカーで行ったことがあるが道路が狭く駐車に困ったことを思い出した。

最初の目的地であるチェルトナム(Cheltenham)には午前中に到着に到着した。かつては羊毛で潤った小さな村であったが温泉が発見されてから保養地となったと言う。土屋守のイギリス・カントリー紀行によれば「ローマ人が都市文化をつくり、イギリス人が田園の





文化をつくった。」と言われるとおりイギリスの田園風景は美しい。なかでも、コッツウォルズ地方は絵本のような村々が点在する地方であり、南のバース（ローマ浴場で有名）から北のストラトフォード・アポン・エイヴォン（シエクスピの

生誕地）までの丘陵地帯を指しており、チェルトナムはその中央に位置している。タウンホールには温泉の水が飲める場所があり、試飲してみたが美味しくはなかった。昼食は新しく開発された Regent Arcade ショッピングセンター（2階建て70店舗、レストランは5箇所）内で済ませた。メインストリートの Promenade 通り（下の左の写真）を中心に散策した。中心にはバスセンターがあり、パーク・アンド・ライドと表示したバスが停車していた（下の右の写真）。大きな村ではないがここでも自家用車の規制があるようである。



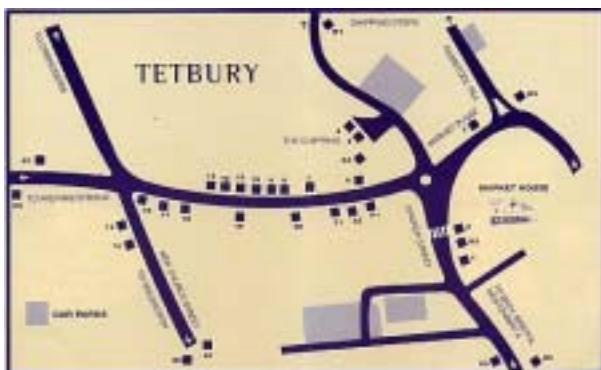
市街地は 1.5 km 平方ぐらいで、その外は田園地帯で、新旧の文化が混在していた。次の目的地はバイブリー(Bibury)である。コルン川(River Coln)に寄り添うような小さな



村である。川の水は透明で、川藻、鴨、白鳥、鱒などが共存していた。上の左の写真は村の中心にあるスワンホテル、右はこの村の典型的な町並みである。数百年前の生活を見る思いであった。写真右下の草地は野鳥保護のために立ち入り禁止となっていた。近くには

大きな鱒釣り場があった。

次に、サイレンセスターを通過して、宿泊地のテットベリーへ向かった。



この村にはアンティークショップが多いのに驚いた(左の図の黒い四角)。いろいろな歴史の変遷を経てこのような商業が活発になったのであろう。昔は羊毛の取引で栄えたときもあったようだ。現在はロイヤルファミリーの別邸があることでも知られている。宿泊するホテル Hare & Hounds は村の中心から南に 3 km 行った

田園地帯にあった。典型的な英国カントリースタイルのホテルで過去 40 年間同じ所有者が運営していると言う。Best Western 系列のホテルでインターネットで予約した。下の写真はホテルの入り口付近であるがかなり年季が入っており設備も大分古い落ち着いたホテルであった。特に裏庭(下の写真)はすばらしかった。専任の庭師が常に手入れをしているようであった。コッツウォルズ地方の家はいずれもこの地方で採掘される石灰岩(Light Grey, Honey, Light Brown)で作られており、このホテルも例外ではなかった。



インターネットがなければこのようなホテルには泊まれなかったと思



うとITの発達が旅行にも大きく影響していることを実感した。

ここには2泊した。明日はバースなどへ行く予定である。